

## ハワイ大学中国研究所での在外研究

人文学部教授 田村 和彦

わたしは、2017年4月より2018年3月まで、およそ1年間、ハワイ大学中国研究所に所属して、在外研究をおこないました。これまで、中華人民共和国のいくつかの大学や、ドイツのハンブルク大学などで、中国研究の様子を見学させていただきましたが、ハワイへは渡航したこともなく、後述するように、多くの日本の方々、ハワイの方々のおかげで、同大学への渡航が実現し、充実した研究時間を過ごすことができました。まず、ここに記してお礼申し上げます。

ハワイ大学中国研究所における在外研究の成果は、一昨年、すでに経済学部瀬戸林政孝先生が報告されているので、この小文ではすこし焦点をずらして記してみようと思います。

近年の中国研究においては、英語圏での研究蓄積も急増し、また、中国国内においても、以前にも増して、英語圏で博士号を取得して、帰国後に就職する状況が顕著であり、それは研究関心にも反映されています。わたしは、英語を国際語として、学術における共通語とする風潮には異議を唱える立場です



1) ハワイ大学中国語授業  
本人撮影

が（世界システムへの批判として、以前北京大学費孝通記念シンポジウムで発表したことがあります。詳しくは、ホームページに掲載しております「[Expectation for “Diverse Anthropologies” and the actuality of “World System” in EastAsian Anthropological Studies – Case Study of the Serious Similarities between Previous Studies and Zhu Yujie’s World Heritage Research Papers](#)」）、英語圏への留学、研究の経験がないため、この貴重な機会を利用して、英語圏の大学での研究を希望するに至りました。

同時に、背景を異にする、多くの人々が、どのように緩やかな共通のルールを作り、また、個人的なネットワークを展開しているのか、といった問題に関心があるため、こうした状況を直接観察できる、多くの移民によって成り立つ社会にある大学、研究所を希望しておりました。

在外研究申請当初は、East-West Center の訪問研究員を希望しておりました。ここには、すでにご退職されていますが、台湾出身の著名な文化人類学者の David Wu (呉燕和) 先生がいらっしゃる（先生のご経歴は、『人類学家三部曲：故郷・田野・汽車』2006年、台湾時報文化出版に詳しく記されています）、元同志社大学の日野みどり先生も、時期的にはちょうど入れ替わりになりますが、同センターにいらっしたので、こうした研究会やシンポジウムで一緒した方々に情報をいただきながら手続きを進めることができました。

しかし、わたしの申請年から在外研究の規則が変わったようで、最終的に在外研究が認められたのが前年10月末になったため、事前に準備した同センターへの申請手続きが無効になってしまい、新たに渡航先の変更をする必要が生じました。

幸い、瀬戸林先生が、ハワイ大学（East-West Center は、同大学とは別組織だが、ハワイ大学マノアキャ

ンパス内にある)で訪問研究員をされていたことから、ハワイ繋がりで、急きょ、先生から Center for Chinese Studies をご紹介いただき、無事訪問研究員の受け入れ先を確保することができました。ハワイ大学は、いろいろな意味で戦後の「地域研究」の枠組みの影響を強く受けていることもあり、わたしの問題関心、専門にふさわしい研究場所でした。

また、急な変更が生じた手続きに必要な書類などの点では、人文学部英語学科の諸先生方、とりわけ、Jefferson M. Peters 先生、樋渡真理子先生、毛利史生先生の多大なご助力をいただき、整えることができました。住居や生活環境、ハワイ大学そのものについては、瀬戸林先生と大津敦史先生にご教示いただき、出発にあたっての準備を整えることができました(大津先生のお名前は、ハワイ大学の様々な部署の方からも、繰り返しお聞きしました)。そして、ほぼ同時期に渡航することになった人文学部歴史学科の福嶋寛之先生には、アメリカ合衆国への渡航に関する様々な情報をいただきました。これらの先生方の大きなご助力をいただくことで、あわただしいなかでもなんとか渡航準備および研究環境のセッティングをおこなうことができました。無事、成果をあげて帰国することができた大きな要因として、様々なご経験とご見識、ご専門をお持ちの先生方がいらっしゃる総合大学である福岡大学に所属していたことが大きいものと考え、感謝しております。

ハワイ大学は、アジア社会の研究で著名な社会学部、人類学部(オバマ前大統領の御母堂も在籍して

いたことがあります)、中国研究センターなど、アジア研究を志す者にとっては、恵まれた環境が整っています。図書館の資料も充実しており、思いがけない資料を見つける喜びもありましたし、その一部は、すでにシンポジウムや小文で使用することができました。また、上記の部門が、それぞれ、自著や新たな論文を携えた外部の研究者を招聘しては小規模なシンポジウムを頻繁に開催していたため、新たな研究動向について見識を広め、刺激を受けることができました。

ハワイ大学は、小さな島の州立大学ではありますが、太平洋の中継地としての、人の移動の結節点としての側面は残されており、面積や人口で数量的に把握できる以上の潜在力を感じることでなりました。

空いた時間には、同大学で中国語教育に携わる先生方の授業にお邪魔していました。これは、福岡大学での現在の仕事上の関心から最近始めた趣味ですが、ハワイ大学では、中国研究所や孔子学院の先生方の開講している授業に、オブザーバーや学生として出席させてもらいました。あわせて、それぞれの先生方の授業方針や目下の問題などをインタビューしたり、テキストや教材編集の現場を見学したり、語学教育について議論したりと、こちらも楽しい、刺激的な時間を過ごすことができました。

最後に、こうした日々のなかで感じた、研究以外の点についていくつかの点を思い出すままに記してみたいと思います。

まず、教育現場では、大学、公立中学、小学校を問わず、電子化が進んでいる点、学習者の意欲に応じて、自分のために勉強を進める仕組みが実際に機能している点に興味を覚えました。同じく電子化が進む中国とは、異なるベクトルを感じることができ、今までの経験を相対化できたことも収穫でした。

つぎに、中国本土で研究をしていた時とは違った意味での人々のフットワークの軽さについても、興味をそられました。社会活動や剣道で知り合った方々それぞれにダイナミックな移動とその苦労や喜びの歴史があり、そのライフストーリーを聞くことには興味がつきません。近年は、物質文化研究に凝っていましたが、様々な方々の生きてきたお話を聞くことに、改めて魅かれました。

時間を見つけて、オアフ島の墓地めぐりをしてい



2) 孔子学院中国語授業  
本人撮影

たのですが、上述のライフストーリーを背景に、様々な墓碑を見て、いろいろと想像することもまた感慨深いものです。

また、大学にはバスで通いましたが、現地のバスは、まだ運転免許を持っていない子供や、お年寄りの利用が多いようです。車椅子に配慮した前方座席や、乗降時に方便のように車体の低下する装置など、多様な人々の利用を踏まえたバスのあり方には感動を覚えました。

最後に特筆すべきは、凡庸なようですが、出会いでしょうか。子供の、日本で通っていた小学校が開校したときに在籍していた大先輩に出会ったり、わたしの元ゼミ学生がハワイ大学で働いていたりといった、今までの関係を辿るような出会いもさることながら、ハワイで1年過ごさなければ、一生交差することのなかった方々と知り合い、様々な人生に触れることができたことがもっとも大きな収穫でした。

この文章を書くために、帰国から半年の時間がたってからつらつらと思い起こせば、いわゆるフィールドワークをするつもりで出かけたわけではありませんが、結局、形にすることはないけれども、自分に沈潜するようなフィールドワークをしていた気もしないではありません。

最後に、改めて、貴重な機会を与えてくださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。



## シドニー留学報告

医学部助教 津川 潤

## 留学まで

2017年4月1日から1年間、神経筋超音波と神経電気生理を学ぶためシドニー大学 Brain and Mind center (BMC) へ在学研究員として滞在しました。あっといふ間の1年間でしたが、滞在中に多くの貴重な経験をすることができました。

私は医学部卒業以来、臨床中心の生活を送っていました。神経内科専門医を取得したころから、臨床神経生理に興味を持つようになり、臨床神経生理学会や脳波懇話会、筋電図セミナーなど臨床神経生理に関連する会に積極的に参加し末梢神経疾患や筋疾患の電気診断の専門性の高さを感じるようになりました。しかし、1人で勉強するには限界があり、学外での研修を考えるようになりました。当教室の坪井教授に相談し、2016年4月に千葉大学神経内科の桑原教授からシドニー大学 BMC の Matthew 教授を紹介して頂くことができました。

留学することに関しては、私は大変恵まれていたと思います。まず、2016年5月頃には研究室から invitation letter を頂き、内諾を得ることができたため、約1年間も留学準備に費やすことができました。また、受け入れ先の施設には日本から3名の神経内科医が留学していたため、事前に多くの情報を得ることができました。準備期間をしっかりと確保できたこともあり、ビザの申請や受け入れ先との手続きに関しても大きなトラブルはなく、予定通り3月31日に家族4人で無事に出国することができました。(Figure.1)

## シドニー大学 BMC

シドニーに到着して3日目に、シドニー大学 BMC Fore Front Fronttemporal Dementia and Motor Neuron Disease を訪れました。Prof Matthew Kiernan に挨拶するためでしたが、実はこれが初めての顔合わせでした。Matthew 教授は若くして JNNP の chief editor を任されるほどの優秀な Neurologist でありながら、スタッフ思いの優しい紳士で英語が苦手な私にも丁寧に対応してくれました。

Matthew 教授の専門は ALS、特に発症早期から ALS でみられる cortical hyperexcitability を Threshold tracking TMS という経頭蓋磁気刺激装置を用いて評価することを研究室のメインテーマとしていました。この技術を習得するためにオーストラリア国内や海外から多くの研究生（多くは臨床医）が留学に来ていました (Figure.2)。私は、神経筋超音波の技術習得と臨床研究がメインテーマでしたが、良い機会なので TMS もできるかぎり勉強させてもらうようにしていました。子供たちの学校や生活のセットアップを済ませ、入国から10日目にクリニックでの研究をスタートすることができました。

BMC は運動ニューロン疾患 (MND) 専門クリニッ



Fig.1 : 3月31日シドニーへ向け成田空港を出发



クで、患者さんは他院からの紹介で受診されます。診察を担当する Physicians は Matthew 教授を含め 3 名で、その他に臨床心理士や MND 専門ナース、私たちのような留学生の総勢 20 名で構成されていました。患者さんは、担当医による問診・診察→電気生理検査 (NCS, EMG, TMS, etc) & エコー→心理検査→Prof の診察→MND 専門ナース (multidisciplinary care) という流れで診療が進んでいきます。検査が多い日には 2 日に分けて受診することもありました。診断した後も 1-2 ヶ月毎に follow up し、TMS や心理検査のデータを集積していました。私は、初診時の神経筋超音波検査を担当してもらいましたが、同時に簡単な問診や神経診察を行うことができました。これは、臨床研究神経だけでなく英語のトレーニングとしても良い機会を得ることができたと思っています。

留学前、神経エコーで計測していた部位は、正中神経 1 か所と頸神経 3 か所のわずか 4 か所のみでしたが、留学先では計測する神経の数や範囲を広げ、頸神経、迷走神経、正中神経 4 か所、尺骨神経 6 か所、脛骨神経 1 か所、腓腹神経 1 か所を計測するようにしました。また、筋エコーの測定部位も増やし、舌筋、僧帽筋、三角筋、上腕二頭筋、腕橈骨筋、尺側手根屈筋、拇趾外転筋、小指外転筋、第 1 背側骨間筋、腹直筋、下位胸椎傍脊柱筋、内側広筋、外側広筋、前脛骨筋、腓腹筋、ADH に関して線維束性収縮 (Fasciculation: Fasc) の有無をチェックしていました。ここで学んだ技術を帰国後に福岡大学病院でも継続しようと考え、特に神経エコーの施設基準作

成を目的とし 2018 年 2 月に「福岡大学 医に関する倫理委員会」に臨床研究実施計画書を提出し、臨床研究を開始しています。(「当院における神経超音波検査の検査手順の確立と基準値設定に関する研究」)

研究テーマとしては、1) ALS の神経エコーサイズと臨床像の関係、2) fasciculation の頻度と臨床像との関係、について研究しました。1) の成果については、2017 年 9 月に Gold coast で開催されたオーストラリア・ニュージーランド神経学会・Neurophysiological workshop で「Median/ulnar nerve ultrasound cross-sectional area ratio in ALS」に関してポスター形式で発表し、帰国後の 2018 年 5 月に札幌で開催された日本神経学会学術大会で「Characteristics of nerve size in ALS subtype using neuromuscular ultrasound」に関して英語口演形式で発表しました。また、テーマ 2) については、帰国後にまとめたものを神経生理学の国際雑誌である Clinical Neurophysiology に original article として投稿し、7 月に accept されました「FASCICULATION INTENSITY AND DISEASE PROGRESSION IN AMYOTROPHIC LATERAL SCLEROSIS」。

超音波検査だけでは時間が余ってしまうので、TMS の検査にも積極的に参加するようにしていました。TTTMS は、BMC と関連施設である Westmead hospital で ALS 診断の補助検査として行われており、ALS の upper motor neuron sign を評価する電気生理検査としての位置づけでした。筋電図などは主に lower motor neuron 徴候を評価するものですが、upper motor neuron 徴候は診察所見が主であり、TT-TMS は upper motor neuron 徴候を評価出来得る唯一の電気生理検査だと感じました。未だに ALS は神経内科医が診察して得られた臨床症状から診断されることを考えると、TMS は ALS を診断する上で有用な検査だと感じました。但し、機械やシステム (プログラム) にかかる費用が莫大で、残念ながら現時点では福岡大学でこの検査を行うことは難しく、いつか検査できるようになることを期待したいと思います。

### オーストラリアでの 1 年間

滞在予定が 1 年間と限られた期間だったため、休日は可能な限り家族で出かようと心掛けていました。滞在中に、オーストラリア国内の複数の都市を訪れ



Fig.2 : BMC のスタッフと (向かって右側中央が筆者)

ることができました。中でも特に印象深いのが、クリスマス休暇にパースへ旅行したことです。シドニーとパースはオーストラリア大陸の東西に位置していますが、その2都市を4日間かけて電車で横断するインディアンパシフィック号の旅を経験することができました。シドニー→アデレード→ナラボー→パースと各都市を観光しながら電車で旅をするのですが、アデレードからパースへの道中にナラボー平原という見渡す限り何も無い大平原を通過します。ここでは、特にオーストラリアのスケールの大きさを感ずることができました。(Figure.3)

#### Chatswood での生活 (Figure.4)

海外での部屋探しは初めての経験でしたが、これにはほんとうに苦労させられました。オーストラリアで賃貸物件を探す場合、まずweb上で物件を検索し、お目当ての物件が見つければ、inspection (内覧)の日程を確認します。指定された時間に建物の前にゾロゾロと集まって希望者全員で内覧するのが一般的で、水曜日と土曜日と決まっているようです。私は、事前に日本から現地のエージェントとコンタクトを取っていたので、シドニー出発前にいくつかの物件情報を送ってもらっていました。入国4日目の水曜日に初めて inspection に望みましたが、実際に部屋を見てみると、送ってきた画像と違ってちょっと汚い物件ばかりでした。土曜日に改めて inspection に臨み、時間が迫っていたため妥協して契約しましたが、これがあまり良い物件ではありませんでした。私の住んでいた街は Chatswood というアジアンタウ

ンでアジア系飲食店が多くゴキブリの出現率が半端ないです。夜間、街中を歩いているとそこら中でゴキブリがうごめいています(虫が苦手な方は事前のリサーチが非常に大事です)。うちのキッチンにも小さなゴキブリが頻繁に出ました(ジャーマンコックローチと言うらしいです)。妻や娘はゴキブリが大の苦手だったので、日本では馴染みのないペストコントロールというものを計4回も依頼しゴキブリの壊滅を試みました。これも貴重な経験?だったのかもしれない。

こんな Chatswood に住もう決めた一番の理由は、日本の食材が揃うことやシドニー大学と子供たちの学校(シドニー日本人学校)までのアクセスが良いことでした。Chatswood には、多くのアジア人が住んでいましたが、その多くは中国人でした。日本人も多く、オーストラリアで最も日本人が住んでいる町だそうです。そのため、アジア系のスーパーには日本の食材が想像以上に揃っていました。(しかし高い)。

#### 最後に

あっという間の1年間で、帰国するときには、ようやく現地での生活や研究室の流れに慣れてきたと感じていたため、やや短い気がしましたが、この留学で医学なことだけでなく、多くの貴重な経験を経ることができました。帰国後はこの経験を後輩に伝えることができれば幸いです。1年間の在在外研究に関して支えてくださった本学関係者の皆様はこの場をお借りして深くお礼申し上げます。



Fig.3 : インディアンパシフィック号の旅 (人口4人のクック駅にて)



Fig.4 : Chatswood はリトルアジア



## オーストラリア・ブリスベンでの長期海外研修

薬学部助教 松本 太一

### ブリスベンでの生活

ブリスベンは、オーストラリアの東部に位置し、日本人に馴染み深いであろうゴールドコーストから北西へ車で2時間のところにある。ブリスベンシティーのど真ん中を流れるブリスベン川には、無料のフェリーが運航されており、夜間に乗れば、無料のナイトクルーズを楽しむことができた。オーストラリアと言えばコアラやカンガルーを容易に想像すると思うが、ブリスベンには、世界で最も古いコアラ保護区であるローンパイン・コアラ・サンクチュアリがある。ブリスベ市内からアクセスがよいため、私たちは、年間パスを購入し、足しげく通った。コアラやカンガルーとの触れ合いは、私たちにとって癒しであった。



丸くなって気持ちよさそうに眠るコアラ

研修期間中、研究活動を積極的に行ったが、課外活動も同様である。ゴールドコーストでは海水浴を楽しんだ。グレートバリアリーフでは、カラフルな魚やサンゴ礁と戯れた。オーストラリア東部のブリスベンから西部のパースへのフライトは、国内にもかかわらず、7時間半かかった。パースから高速フェ

リーで1時間ほどのところに浮かぶロットネスト島では、今やこの島にしか生息していないクオッカという人懐っこい小動物と出会った。帰国を1ヶ月後に控えたある日、「Taichi、このままオーストラリアを堪能せずに帰るのはもったいないぞ」と言われ、2週間の休みを授けられた。この2週間を使って、シドニーとエアーズロックを訪れた。あちこちと行したおかげで、海外旅行や長時間のフライトにすっかり慣れることができた。



パースで出会ったクオッカとのツーショット

### 研究活動

研修の場は、ブリスベン郊外にあるトランスレーショナル・リサーチ研究所（Translational Research Institute、以下TRI）であった。当研究所は、プリンセス・アレクサンドラ州立病院に隣接しており、文字通り、トランスレーショナル・リサーチが盛んに行われていた。研究施設としてだけでなく、建築物としての評価も高く、過去に、ブリスベンで最も美しいビルディング5選に選ばれた経歴を持つ。7階あるフロアのうち4階分が研究フロアであった。オフィススペースにも実験スペースにも仕切りがなく、

研究者同士、研究グループ同士の交流が盛んであった。



仕切りのないオフィススペース

TRIには6つのコアラボラトリーが設置されており、各コアラボでは、専門のスタッフが機器のメンテナンスや研究者のサポートを行っていた。私が頻繁に利用したフローサイトメトリーコアラボには、最新のセルソーターが3台、セルアナライザーが8台設置されており、研究所の規模の大きさを感じることができた。研究施設だけでなく、コンピューターネットワークがよく整備されていた。研究所内の全ての研究機器の予約は、イントラネットを通じて行うことができた。誰がいつどの機器を使うかを簡単に確認することができ、非常に便利であった。また、巨大な容量のネットワーク・ハードディスクが導入されており、機器で得られたデータをそこに放り込めば、自分のコンピューターとあつという間に共有できた。TRIで過ごした1年間でフラッシュメモリーに触る機会はほとんどなかった。

このような整備された研究環境の中、ジャン・ピエール・レベック (J. P. Levesque) 先生の下で在外研修を行わせて頂いた。レベック先生は、顆粒球コロニー刺激因子が造血幹細胞を骨髄から循環血液に動員する仕組みについて長年研究され、この分野において、世界をリードしてきた研究者である。レベック・ラボでは、毎週月曜日で全体ミーティングが開かれた。そこで、その週の実験計画を各自発表した。英会話力ゼロの私は、毎週日曜日の夜は、月曜日のミーティングに備えて、カンニングペーパーを作成

するために時間を割かなければならなかった。また、毎週水曜日には、チーム別のミーティングが開かれた。前の週に行った実験結果を全員でディスカッションし、次の実験計画を練った。会話のすべてを理解できたわけではないにしろ、この分野で世界を牽引しているチームのミーティングは、非常にエキサイティングであった。このラボでの研究活動すべてが勉強になることばかりであったが、特に、マルチカラーフローサイトメトリー解析の実際や、解析ソフトフロー・ジョー (FlowJo) の使い方、骨髄マクロファージの初代培養は目からウロコであった。

### 最後に

英会話力ゼロでスタートした長期海外研修は苦難の連続であったが、それを乗り越えられた今は、なんとも言えない達成感があり、また、自信のようなものがついた。このような機会を私に与えてくださり、協力、支援して頂いた関係者の皆様やレベック・ラボの仲間に深く御礼申し上げる。



最終日に開いてくれたフェアウェルランチ

